

# 卒論概要

## ゴーギャンの「象徴主義絵画」とタイトルの機能

～《波間で（オンディーヌ）》のタイトルの変更をめぐる～

安武陽一郎

### 序論

ポール・ゴーギャンは、後期印象派の画家として、あるいは、総合主義の画家として評価されている。現代美術への歩みを顧みるならば、画家がこの様式によって与えた影響は小さくない。そのため画家は、現代美術の先駆的存在として位置付けられてきた。

本稿では、造形面だけでなく、新たにタイトルの機能に目を向けることによって、現代美術の先駆者としての画家の再評価を試みたい。画家の作品をめぐる既往の研究において、そのような観点からのものは、少なくとも現在、稿者が確認した限りでは認められない。

しかしながら、本稿で中心に扱う《波間で（オンディーヌ）》1889を詳細に見ることで、タイトルの問題が浮かび上がってきたのである。本稿では、まず《波間で（オンディーヌ）》の作品が当初《波間で》とされていたのが、オークションによって《オンディーヌ》と変更された背景を改めて検討した上で、当時の象徴主義者が求める見解およびゴーギャン自身の絵画に対する言説を詳細に考察することによってゴーギャンの新規性の提示を試みる。

### 本論

本作品は、1889年の展覧会の際、《波間で》とされたが、その二年後のオークションにて、《オンディーヌ》とタイトルを変更された。このタイトルは、当時、ヨーロッパ各国で流行していた文学作品に由来する。

画家と象徴主義文学者の親交が始まったのが、本作品制作後の1890年来からであるため、このタイトル変更に関与した可能性も考えられる。また、画家は、文学的な象徴主義絵画を批判し、重要なのは物語ではなく形と色そのものである、とする一方で、作品売買において、そうした態度は得策ではないと考えていた。従って、本作品のタイトル変更は、おそらくは作品売却のためであり、画家の制作理念を反映したものではない、とみることができる。

ところで、観者は、作品の主題内容を理解するにあたって、多かれ少なかれタイトルに頼らざるを得ない立場にある。そのため、本作品に《オンディーヌ》というタイトルが与えられた時から、観者は、画面上にその物語を読みとろうとしたと思われる。また、タイトルは、その変更が容易になされ得るという点で、物理的に作品と結びついているものではない。そのため、

画家が、制作時点での意図とは無関係に、観者に対して、作品のイメージを変更したい場合、タイトルのみを操作することで、その実現は少なからず可能である。本作品におけるタイトル変更は、おそらく無意識的にであろうが、そのようなタイトルの機能を利用するものであろう。

これらのことから、本作品を考察する上で、タイトルの問題と無関係に論じることはできないだろう。また、このような観点から考えるならば、画家の作品におけるタヒチ語のタイトルには、新たな存在意義がみえてくるのである。画家は、タイトルに、できるだけタヒチ語を用いようとしたが、観者のほとんどがヨーロッパ人であったことを考えれば、当然それらは、彼らにとって意味不明な記号に過ぎなかったであろう。また、そのタヒチ語には、つづりの誤りや、意味の誤解などが多く見られる。しかしながら、物語ではなく、絵画そのものを重視する画家にとっては、むしろそうしたタイトルの方が、都合がよかったに違いない。

本来、絵画の主題内容を規定し、観者に伝達する機能を持つタイトルを、不明確にしておこうとする画家の態度は、作品の主題内容そのものを不明確にしようとするものである。重要なことは、言葉による理解ではなく、絵画そのものからの感動である、とする画家の主張は、ここにもはっきりとあらわれているように思われる。

## 結 論

現代美術の造形性への探求は、同時に、作品の主題、ひいてはタイトルの存在意識への問いかけを伴うものであった。

それは、現代美術への流れにおいて、次第に明確なものとなってゆくが、もちろん、19世紀の画家であるゴーギャンが、そのような問題意識を明確に持って、異国語によるタイトルを付け出した、と結論付けるのは早急かもしれない。とは言え、絵画そのものへの探求を進めれば進めるほど、本来的に作品の主題内容を説明しようとする、タイトルの存在が画家にとって、次第に煩わしいものになっていった可能性は否めない。

タイトルの存在意義の問題は、ゴーギャンが宿命的に背負うべき、課題のひとつであったとみることができるのである。